

「型と個性」～ ベルリン自由大学でのワークショップに寄せて ～

平成20年8月8日

遊武会主宰 石田泰史

武術を学ぶにおいて、試合と同様に実戦的な動きを自由につなげてゆく「乱取稽古・地稽古」などと呼ばれるものに対し、基本的な理論を学ぶ為に、定められた通りの手順に従って繰り返し行なわれる「型稽古」というものが存在する。中には数百年に亘り受け継がれてきたものもある「型」というものが深い意義を持っているということは、それに関わる者のほとんどが理解しているであろう。これは武術に限らず、日本の伝統的な舞踊や音楽などの諸芸においても、同様のことであると思う。ただ、武術の場合は必ずしも「一般的な意味での型」がそのまま実戦的な有効性につながる訳ではないということも広く知られていることであり、それ故に型というものに対する価値観が多様化している。

筆者は無双直伝英信流という古流の居合術を出発点に、様々な形で武術稽古の枠を広げてきたが、その根本となっているのは「空間固定・相対固定」（固定理論）という考え方である。これは「動く為に固定する」、あるいは「動きの明確な基準を持つことで、表面的な動きを隠す」というものだ。その最大の手掛りとなったのは、古流居合術の基本の型であった。

空間固定とは身体の一部（主に手先）を空間上の任意の座標に固定し、それ以外の部分が変化することによって、結果的に固定した部分も変化の一部になるというものである。これに対し相対固定は、身体の一部を身体上の別の部分に対して位置関係を固定して動くというものだ。これは主に手先と体幹部の関係において行なわれ、手先の能動的な動きを抑制する意味がある。

武術の型の中で空間固定・相対固定という二種類の固定は、多くの場合身体上の複数箇所で行なわれる。つまり複数箇所を同時に認識して動くということが求められるのである。

居合術とは刀を鞘から抜き出しつつ敵に切り付ける技術を学ぶものである。当然変化の主役は刀や、それに直結する右手ということになる。変化の主役であるからこそ、その部分を敵から隠す必要がある。最も動かせたい部分を最後まで隠しておく為の方法論が固定理論なのである。

古流居合術の型には、一見不合理に見える動きも多い。これは不利な体勢から、わずかな変化によって瞬時に形勢を逆転する為のメソッドが、型の中に込められているからである。

型を正確に学ぶということは、動きそのものを身に付けることではなく、理論を体得することである。一つ一つの型の中に込められた理論を拾い出し、その日常的な動きとは質的に異なる身体操法の理を見出すことが、型を学ぶ意義であると言えるだろう。これは即ち型に汎用性を見出す作業でもある。想定された敵の動きに対して、定められた手順で対応するというのは、型の表面に見えるだけのことであり、本質とは必ずしも直結しないということを認識しなければ、型の本意を理解することはできないはずである。

空間固定・相対固定は、具体的な動きとして捉えることができる。これに対して「空間変化・相対変化」という考え方を、筆者は型を理解する概念の一つとして持っている。

空間変化とは可視的な変化、つまり日常的な感覚と同じで、空間上を動いているものを変化しているものと捉えることである。一方の相対変化は、それ自体は空間的に静止しているが、空間変化する物との対比によって、その関係が変化しているという考え方である。簡単な例で説明すると、右手を上に掲げるといった動作において、肩から先の右腕は空間変化を行っており、右手以外の身体は外見的には静止しているが、右手に対しては相対変化が起こっているという捉え方である。要するに変化というものの基準を固定化しなければ、変化という概念自体が多様化することだ。この相対変化を自覚して動くことによって、型の意義をより精密に理解することができるようになる。先述の複数箇所同時認識の感覚も、相対変化を知ることで理解し易くなるかと思う。

さて、上記のような考え方において、身体上で最も具体的な働きを持つのは体幹部である。手先の動きも、身体の移動も、全て体幹部を基準とした変化によるものと言える。

胴体部分全体を体幹部として認識する場合と、その中心を通る細い軸（体軸）をそれとして捉える場合とで、若干感覚的な違いは生じるものの、いずれも身体上の最も大きなパーツとして存在することは確かである。この体幹部や体軸と、手足などの末端部分の動きを併せて認識することが、無駄のない変化への手掛りとなる。

武術に限らず、日本古来の身体文化においては、動きの無駄を極端に嫌う。これは立ち座りや礼式など、本題に入る前の所作からして徹底されており、様式美の段階にまで昇華されてきた。

動きの無駄が最も出易いのは、身体最大のパーツである体幹部である。体幹部の変化を最小にし、それを基準として末端が働けば、本当に必要な動きだけが残し、無駄を排することができるはずだ。

日常的な動作では、正座から立ち上がる際には上半身を前方に傾け、足が効率よく動く為に重心を移動させる。これに対し作法としての立ち上がりにおいては、上半身を垂直に浮き上がらせるようにし、体幹部の前後運動が起らないようにする。そのような限定された条件を与えられた結果、踵の上げ下ろしという非常に小さい変化によって全身に浮きをかけ、部分的な負担を作らずに立ち上がる技術を身に付けるのである。立ち上がるという動作が一つの型になっているということだ。この型を学んだ結果、見える部分での無駄な動きを排すると同時に、部分的な力に頼らない効率的な身体運用法も得られるのである。

全身を最も無駄なく動かす為には、体軸の変化を抑えなければならない。大きな変化は即ち体軸の変化であり、手足などの末端はそれを補う為のものでしかないからである。

合気道などに代表される体術では、相手の中心を制する意識を常に持ち続けなければならない。中心を制するというのは、体軸の変化を制するということだ。相手の中心を固定すれば大きな変化を抑制できる。そして中心を押さえる技法は、主に互いの末端である手先を経由して行なわれるのである。

話を型に戻そう。

質的に違う身体操法を得る為に型があるのだと述べたが、その型を学ぶ上で邪魔になるのが「個性」である。この段階で言う個性とは、個人レベルの日常的な体の使い方であり、ものの考え方である。

武術などの身体操法における型とは、個性を排除するところから始まるものである。型を単なる手順としてしか捉えることができなければ、表面的には似たような、それでいて一人ずつ全く違う動きを繰り返すに留まることになる。そこに共通した質を培うことは非常に難しくなるのである。

優れた型には明確な主張がある。それは一見して気付くことのできるようなものではないが、それを見ようとする意識があれば、やがて見えるようになってくる。ここに個性の排除が必要なのである。型の本意に身を委ね、個性を排除できたときに違う次元の質を獲得できるようになる。質の違う身体を自覚したときに、初めて個性の発現が可能になるのだ。新たな質を得た意識と身体からは、新たな型の創造も可能になる。こうした繰り返しによって、表面上の差異に左右されない質が伝わっていくのである。弓道に「正射必中」という言葉がある。正しく射れば必ず中するという意味だが、正に型の本意を捉えた言葉であるように思う。的に中るかどうかは結果であり、中てる為には様々な方法が考えられる。しかし弓を引き矢を放つまでを教え通り正しい型で行なえば、結果は自ずと決まってくるというのである。弓道では一連の動きを「弓道八節」と言って八つの段階に分けているが、その一つ一つが独立した型であると考え、「正射必中」という言葉に大きく頷ける。弓道の練達者は射る前に中るかどうかが分かるという。これこそ質を獲得した者だけの感覚と言えるだろう。

個性の排除は外的な働きかけによっても促すことが可能である。能楽で使われる能面などがその代表ではないかと思われる。生の表情を消し、視界を極度に狭くすることで、必要な動きのみを引き出すことが、能面に内包された役割と言えるのではないだろうか。

武術では稽古の前後に黙想を行なうことが多い。心を穏やかにし、無念無想の状態を得ることで心身をクリアなものへと変換させることが黙想の意義である。黙想するときには目を完全に閉じることもある

ようだが、筆者が幼少期に剣道を学んだ際には、「黙想は半眼で行なう」と教えられた。目を閉じると逆に様々な念が湧き、無の状態になれないと言うのである。これは比較的誰にでも実感し易い感覚であると思う。半眼の場合は半眼の状態を保つことに意識が集中するので、厳密には無心とは言えないが、少なくともそれ以外の雑念が湧きにくくなるのは確かである。

半眼の状態は、能面の視界とも重なってくる。無心の境地とは即ち個性が取り払われた状態であると言える。それを瞬間的に作り出す役割が、能面や半眼黙想にあるのだと考えられよう。

固定理論や相対変化などは、「動かさないことで作る変化」と言ってもよいだろう。見えざるものを変化として捉える感覚は、自身を内観することにもつながるはずである。

型はどこで切り取っても、それぞれの瞬間に意味がなければならない。そこに個性の入る余地は元々ないのである。繰り返しになるが、型とは見える部分での動きの手順ではない。それは質を獲得する為の暗号とも言えるもので、ひたすら反芻を続けることによって、そこに隠された本意に気が付いたとき、初めてその存在意義が理解できるというものであろう。

型とはそれを作り上げた者たちの優れた身体観そのものであり、時空を超えて我々の身体に語りかけてくれる声でもある。

以上